

● 視点アジア



筆者の自宅近くにある仏教寺院で新年のお祈りをする人たち＝3日、タイ・バンコク

[分かち合う世界へ]38、撲滅へ なすこと考えてアジア

自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2021/01/10 15:31

皆さんは2021年をどのように迎えられるだろうか。20年はコロナに明けてコロナに終わった年だった。ここタイでは、ほとんどゼロか1桁だった毎日の新型コロナウイルス新規感染者数が、昨年12月半ばから200人、300人と日に日に急増し、1月4日には745人と過去最多に及んだ。ミャンマー人労働者の宿泊所や彼らが多く働くバンコク近郊の海鮮市場、公・私設カジノなどが大規模クラスターの主な発生地だった。

政府は1月4日から31日まで、全国77県のうち、バンコクを含む28県をレッドゾーンとして特別警戒区に指定し、他県への移動を禁じた。レストランやバーでの酒類提供も禁止になり、飲食店は午後9時あるいはそれ以前の閉店を要請された。

こうした中で一番気になるのは新型コロナウイルスの突然変異だ。ウイルスは常に変異を繰り返しており、強い感染力や強力な致死力を持つ性質に突然変わる危険をずっと保持している。英国や南アフリカなどが発生元といわれる新型コロナウイルス変異種を持った、従来の数倍にもなる感染力は、新たな特性の一つにすぎない。一

番恐ろしいのは、突然変異により強力な致死力を持つ新型コロナウイルスが生まれることだ。

私は国連食糧農業機関(FAO)のアジア太平洋局長をしていた時に立場上、FAOのアジアにおける人畜共通感染症対策を見渡す役目も兼任していて、変異するウイルスの恐ろしさを身をもって感じてきた。昨年4月の本欄を覚えている人には繰り返しとなり申し訳ないが、100年ほど前に蔓延(まんえん)したスペイン風邪は突然変異を繰り返し、強力な感染力と致死力を持つウイルスに変貌し、第2波が終わる約2年の間に世界で推定5千万人、日本だけでも政府の公式発表で若者を中心に約38万人の死者が出たといわれている。国内の死者数は、新型コロナウイルスによる現在までの累計約4千人に比べ、ほぼ100倍だ。

日本の国立感染症研究所の資料によると、スペイン風邪の第1波は1918年3月に始まり、感染力は高くとも致死率は低かった。しかし、その年の晩秋から初冬に蔓延した第2波は10倍の致死率を持ち、しかも15～35歳の若者層に最も多くの死者が出た。

当時の医療と現代医学の違いを考えると単純に比較はできないが、繰り返すウイルスの突然変異は最悪の場合、将来を担う若者たちの命を次々と奪い、取り返しのつかない事態を引き起こす危険を常に帯びている。脅かすつもりはないが、どんなに有効なワクチンや治療薬が開発されても、突然変異したウイルスにそれらが有効であり続ける保証はない。

若者を中心に警戒心の欠如が問題視される中、新たな年を迎えた。新型コロナウイルス撲滅のために自分でできること、自分でしなければならないこと、そして個人としての自分の役割を再度考えてみる良い機会だと思う。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。